

農作物生産情報 (令和5年4月)

気象

(令和4年3月16日 仙台管区気象台発表 東北地方1か月予報より)

向こう1か月の予報は、天気は数日の周期で変わり、平均気温が高い確率が80%となっています。特に期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。

水稲

健苗育成と適期作業で初期生育を確保しよう！

1 育苗

(1) 浸種

浸種は10日～14日間程度（日平均積算水温で100℃が目安）、浸種時の水温は10℃以下にならないようにする。低温で浸種した場合、日平均積算水温で100℃を確保しても、出芽不良や出芽遅れの原因となる場合があるので注意する。

(2) 催芽

育苗器などを利用し、吸水させた粃を30～32℃で16～20時間加温し、ハト胸程度（芽の長さ0.5～1ミリ）にする。

温度が40℃以上になると発芽率が低下するので、特に風呂を使う場合は注意する。



(3) は種

中苗のは種量は、1箱当たり乾粃で100g（催芽粃で125g）とし、厚播きにならないよう注意する。

(4) 育苗土の準備

ふるいにかけて育苗土は、床土と覆土を合わせて1箱当たり5ℓ程度準備する。施肥量は、中苗散播・基肥方式で窒素・リン酸・加里を成分量で1箱当たり各2.5gとする。

(5) 苗立枯病の予防

床土はpHが4.5～5.5の土を使用する。pHが高い場合はpH調整剤で調整する。育苗中は適温を保ち、過湿や過乾燥を避ける。

■ 薬剤による主な防除方法

適用病害	剤型	粉剤（土壌混和剤）	液剤（は種時かん注）
ピシウム菌		タチガレエース	タチガレエース
フザリウム菌		M粉剤 8g/箱	M液剤
リゾープス菌		ダコニール粉剤	1000倍液を1ℓ/箱
(くものすかび)		6～8g/箱	ダコニール1000
			1000倍液を1ℓ/箱
			ナエファイン
			フロアブル
			2000倍液を1ℓ/箱

(6) 置床の準備

ア ハウス育苗方式

置床は育苗箱の底と密着するよう均平にする。砕土が不十分な場合や足跡等のくぼみがあると生育ムラができるので十分注意する。

イ トンネル折衷育苗方式

置床の硬さは耳たぶ程度に調整し、必ず排水溝を設ける。やわらかく、育苗箱が床土に沈み込むようだと、過湿による出芽障害となるので注意する。

(7) 温度管理

生育に合わせた温度管理を行うため、必ず温度計を苗の高さに設置する。

ア 出芽期まで

日中 35℃以下。ハウスでは、シルバーポリトウなどの被覆で、水分保持と保温をする。天気の良い日には、出芽前でもハウスの換気を行い、35℃以上にならないように注意する（シルバーポリトウは風でめくれないよう、箱下に折り込むか、重しを置く）。

イ 出芽揃期～1.5葉

日中 30℃以下。ハウスの大部分の箱で7～8割程度の出芽が見えたら、早めに被覆資材を除く。持ち上がった覆土は乾くのを待って落とし、かん水する。種籾が露出していたら土をかける。

ウ 1.5～3葉

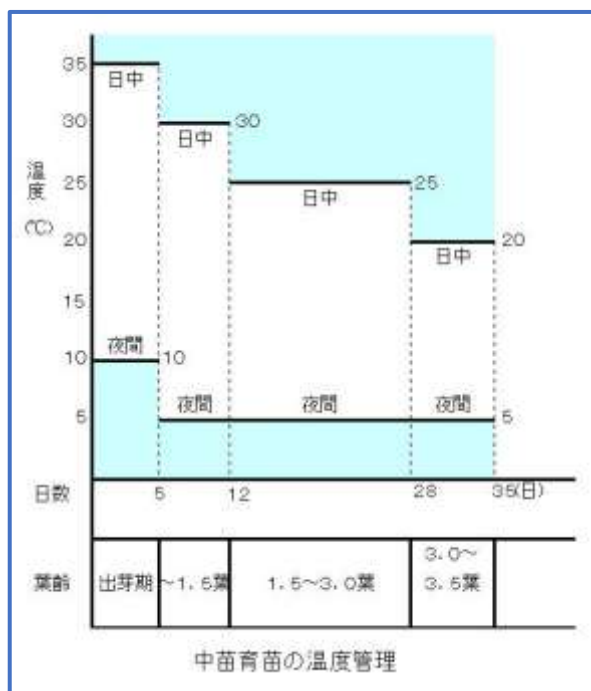
日中 25℃以下。

エ 3葉以降

日中 20℃以下。天気の良い日は外気に慣らし、苗を丈夫に育てる。

※霜・低温が予想される場合

被覆資材での二重被覆を行うか、ハウス内に暖房器具を入れて保温する。



(8) 水管理

かん水は、床土が乾いたら午前中（地温が上がる前）にたっぷり行う。

機械的に毎日かん水すると、箱内の根張りを弱くし、軟弱徒長苗になりやすいので注意する。

2 本田作業

(1) 施肥（基肥）

品質と食味向上のため、窒素の総量は、「つがるロマン」の場合6～8kg/10a、「まっしぐら」・「はれわたり」の場合7～10kg/10aとする。基肥量は1回追肥体系の場合は総量の7～8割、2回追肥体系の場合は総量の6割とする。いずれの品種も側条施肥の場合は、基肥を2割減ずる。

「青天の霹靂」の基肥窒素成分は6kg/10a以内とし、全層穂肥1回追肥体系を原則とする。

多肥栽培では、倒伏したり、いもち病にかかりやすくなるほか、食味・品質の低下につながるため、前年のいもち病の発生程度や倒伏状況に応じて基肥量を加減する。

大豆の復元田では、生育が過剰となり、倒伏のおそれがあるので基肥8割減～無肥料とし、追肥は生育量や葉色を見て判断する。小麦の復元田では、基肥4～6割減とし、生育に応じて追肥を行う。

復元田では、倒伏軽減と初期生育確保、登熟向上のため、ケイカルとようりんを施用すると効果的である。

(2) 耕起・代かき

耕起作業は耕す深さは15cm程度を目標にいていねいに行う。

稲わらを鋤き込んだ水田では、浮きわらを抑えるため水深を浅めにして代かき作業をする。

小麦

排水対策や適期追肥に努めよう！

1 湿害防止

転換畑等では、融雪水、降雨水が長時間停滞しないよう、明きよや排水溝の補修、補強を行い、ほ場外に速やかに排水できるようにしておく。

2 追肥

消雪後、幼穂形成期までのなるべく早い時期に追肥を行う。

追肥量は窒素成分で2kg/10aを基準とし、融雪遅れによる生育遅延、ほ場の地力等を考慮して増減する。

3 病虫害防除

越冬前の生育量が多く繁茂しているほ場では、うどんこ病の被害が大きくなるので、適期防除に努める。

春の農作業安全運動展開中 4月1日～5月31日

トラクター等の大型機械の使用が始まります
まずはワンチェック、ワンアクションで農作業安全！

春作業の準備を急ごう！

今年は3月に入ってからの気温が高く推移していることから、りんごの発芽も平年よりも早くなると見込まれる。自園地の状況を確認し、剪定した枝の片付けやSSの試運転を行うなど春作業の準備を急ぐ。

1 霜害防止対策

今年は生育が早いと見込まれることから、霜害防止対策には万全を期す。一般に、降霜は晴天無風で、前日午後7時の気温が6℃以下のときに危険性が高い。霜害が予想される場合には、气象台から霜注意報が発令されるので、これらの情報に注意する。

■燃焼法による防止

種 類	利 用 方 法
A重油オイル缶	4リットル缶を利用する場合、10a当たり30缶以上を配置する。
霜カット	おがくず：灯油＝2：1（容量）の割合で混ぜたものを2kgずつ袋に詰め、10a当たり40～60個を配置する。

注) 1 灯油の保管量が200～1000ℓ：少量危険物貯蔵届出書の提出が必要

2 〃 1000ℓ以上：危険物取扱者の資格が必要

3 所轄の消防署に「火災と紛らわしい煙又は火災を発する恐れがある行為の届出書」などを提出する。

2 野ネズミ被害樹の治療

若木やわい化樹を中心に野ネズミによる被害が確認されている。樹幹を食害された場合、樹皮が幹周の4分の1以上残っているものは早めにバッチレート塗るか、テープを巻いてカルス形成を促す。

3 雪害を受けた樹の処置

冬期間の積雪の影響で、3分の2以上裂開している枝は、ゆ合の見込みがないので剪去する。被害部は腐らん病や銀葉病の侵入門戸となるので、傷口にバッチレート又はフランカットスプレーを処置する。

ア わい性台樹

側枝のゆ合が可能な場合は、早い時期にビニールなどできつく縛って傷口を密着させ、ひもなどで吊り上げる。

側枝が不足となった樹は、目傷等により側枝の発生を促したり、主幹部に接木をして側枝の補充を図る。

イ 普通台樹

回復可能な枝は傷口を密着させて、かすがいやボルト等で補強し、支柱で支える。

樹形を損ねる被害を受けた樹では、徒長枝を利用したり、高接ぎなどで樹形の立て直しを図る。

4 粗皮削り

粗皮削りは、胴腐らの早期発見やハダニ類、クワコナカイガラムシの防除のため、必ず実施する。

5 基肥

基肥は4月20日頃までに施用する。石灰質肥料は基肥を施用後、降雨があった場合は2～3日後に、降雨がない場合には2週間後を目安に施用する。

肥料の施用量は下表のとおりであるが、追肥を計画している園地では、窒素分の6割を基肥とする。

果実の着色が良くない園地や樹勢が強すぎる園地では、窒素分を半分に減らす。

昨年8月の大雨で樹冠浸水した園地では、生育初期は生育が遅れて弱っているように見えるが、後で回復する場合もあるため、施肥の判断は樹の生育状況をみて行う。また、再発芽・開花した樹では開花結実量が少ないことが想定されるため、施肥の量を調節するなど、可能な限り樹が暴れないように管理する。

■ りんごの標準施肥量（年間総量、園地全面施用）

区 分		施肥量(kg/10a)			備 考
普通台樹	わい性台樹	窒素	りん酸	カリ	
成 木	6年生～	15	5	5	部分（樹冠下）施肥の場合は、施肥量を減ずる
6～10年生	4～5年生	10	3	3	
1～5年生	1～3年生	5	2	2	

6 病虫害防除

今年は生育の進みが早いと見込まれることから、散布適期を逃さないよう注意する。散布間隔は10日以内を厳守し、適正な散布量で丁寧に散布する。

散布予定日に降雨が予想される場合は、事前散布に徹する。

■ 薬剤散布（散布時期は生育状況により変わるので、新しい情報を参考にする）

散布時期	基 準 薬 剤	散布量 リットル/10a
ふじの展葉1週間後頃 （4月下旬頃）	マシン油乳剤 200倍 ベフラン液剤25 1,000倍	300
ふじの開花直前 （5月上旬頃）	SDHI 剤	320
ふじの落花直後 （5月中旬頃）	ミギワ20フロアブル 4,000倍 + デランフロアブル 1,500倍 又はチウラム剤 500倍 又はマンゼブ剤 600倍	350

※SDHI 剤は、以下の5剤から選択する。

オルフィンフロアブル 4,000倍 ネクスターフロアブル 1,500倍

フルーツセイバー 2,000倍 カナメフロアブル 4,000倍

パレード15フロアブル 2,000倍

※チウラム剤：チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル

※マンゼブ剤：ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤

7 腐らん病対策

病害虫防除所の3月中旬調査によると、枝腐らんの発生が平年よりも多い。

枝腐らんは見つけ次第、切り取って処分する。

胴腐らんは再発病斑を含め見つけ次第、次のいずれかの処置を行う。

ア 泥巻きを行う場合は、周辺健全部を含めて病患部に厚く泥を張り付ける。

イ バッチレートまたはフランカットスプレーを使う場合は、周辺健全部を含めて病患部を紡錘形に削ってから塗る。

ウ トップジンMオイルペーストを使う場合は、病患部を削り取り、さらに浸透性を高めるために周辺の健全表皮（上下約5cm、左右2～3cm）を薄く削ってから塗る。

エ 胴腐らんの発病が著しい樹は、病原菌の伝染源になるので積極的に伐採する。

8 マメコバチの放飼と管理

放飼時期の調節のため、筒内の蜂が動き始め、カチカチと音がするようになった頃に、0～5℃の冷蔵庫に保管する。

展葉1週間後頃の薬剤散布2～3日後に冷蔵庫から出し、放飼する。また、土取り場や防鳥網の設置などの管理も怠らないようにする。

9 人工授粉による結実確保

マメコバチ導入園において、不順天候によって十分に活動しない場合やマメコバチの数が十分でない場合には、人工授粉も行う。

昨年8月の大雨で樹冠浸水し、秋に再発芽・開花した樹では、今年の開花量が少ないと想定されるため、通常どおり発芽し、開花したものは人工授粉を行い、結実確保に努める。

10 機械の点検整備と事故防止

4月は、農作業が本格化する時期である。今年も生育が早いと想定されることから、スピードスプレーヤーや草刈り機械、高所作業台車等早めに点検し、いつでも使えるよう準備する。

また、機械作業による重大な事故も発生していることから、走行路や枝の出具合などを確認し、転落・横転・衝突しないよう園内を整備する。

農薬適正使用と隣接農地への飛散防止に十分気をつけましょう！

- 使い残した農薬などは、河川等へ絶対捨てない。
- 農薬を使用する場合には、必ず最新の「農薬登録情報」を確認しましょう。
- 農薬は鍵のかかる専用の場所に保管し、管理を徹底しましょう。

特産果樹

◆ おうとう ◆

摘芽で大玉生産、霜害防止対策を徹底しよう！！

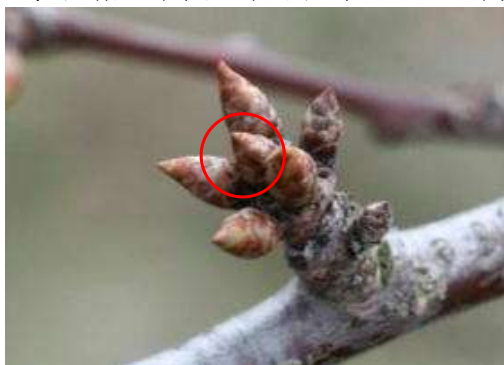
1 霜害防止対策

生育ステージが早いことが想定されるため、りんごと同様、霜害対策には万全を期す。
(詳細はりんごの項を参照)

2 摘 芽

紅秀峰は着果量が多くなりやすいので、催芽前（4月上旬頃）までに摘芽を行う。花束状短果枝の大きい花芽を3芽程度残して、他の花芽を指でかき取る。葉芽（赤い○で囲んだ芽）は残し、人工授粉は必ず行う。

なお、晩霜の常襲地帯や花芽の少ない樹、樹勢の強い樹では行わない。



摘芽前（花芽数：6個）



摘芽後(同: 3個、大きい花芽を残す)

3 結実確保

おうとうの開花期は、低温や強風に遭遇することが多い時期であることから、マメコバチを導入している園地であっても、毛ばたきによる人工授粉を徹底する。

毛ばたきは5分咲き頃と満開期に、計2回実施する。

4 病虫害防除

「開花直前」以降は、散布予定日に降雨が予想される場合は、事前散布に徹する。

■ 薬剤散布（散布時期は生育状況により変わるので、自園地の状況を確認する）

散布時期	基 準 薬 剤	散布量 リットル/10a
発 芽 前	ハーベストオイル 又はトモノールS 50倍	350
開花直前 (4月下旬)	オーソサイド水和剤80 800倍	450
満開5日後頃 (5月上旬)	パスワード顆粒水和剤 又はオンリーワンフロアブル 又はラリー水和剤 又はオーシャイン水和剤 1,500倍 2,000倍 2,000倍 3,000倍	500

※コスカシバの発生が多い園地では、開花前にフェニックスフロアブル500倍を枝幹部に十分かかるように手散布する。

◆ ぶどう ◆

休眠期防除は黒とう病や晩腐病防除の要！必ず薬剤散布する！！

1 園地の点検

雪で傾いた支柱や破損した腕木を取り替え、架線の緩んでいるものは補強して、主枝を結束し直す。また、病害の発生源となる架線上の巻きひげや成り跡、粗皮を除去し処分する。

2 野ネズミ被害の事後対策

野ネズミの食害により回復が見込めない場合は、苗木更新する。

3 施肥

基肥を秋に施用している園地では、4月上旬に全量の10%を追肥として施用する。また、春に基肥を施用する園地では、全量の60～80%を施用する。

昨年8月の大雨の影響で樹勢が弱くなった園地では、施肥の判断は樹の生育状況をみて行う。

■ ぶどう成木の標準施肥量 (kg/10a)

区 分	窒 素	りん酸	カ リ
全 量	15	10	10
春が追肥の場合 (秋に基肥)	1.5	1	1
春が基肥の場合	9～12	6～8	6～8

4 病虫害防除



昨年は8月の大雨の影響で、各地で病害の発生が見られた。休眠期は、黒とう病や晩腐病防除の重要な時期なので、催芽*前に必ず薬剤散布する。

自園地のぶどうの生育をしっかりと観察し、散布が遅れないよう注意する。

ぶどうの催芽

※1 催芽：りん片が開いて褐色の綿毛が見え始めた状態

※2 催芽日：樹全体の20%以上の芽が催芽した日

※3 平年の催芽日（スチューベン）：4月16日（平成15年～令和4年の平均値、調査地は鶴田町境）

■ 薬剤散布（スチューベン、シャインマスカット）

散布時期	基準薬剤	散布量 リットル/10a
休眠期 (4月上旬)	デランフロアブル 200倍 又はパスポート顆粒水和剤 250倍 又はベンレート水和剤 200倍 ※シャインマスカットはデランフロアブルを選択	200
	ガットキラー乳剤 100倍	

5 霜害防止対策

生育ステージが早いことが想定されるため、りんごと同様、霜害対策には万全を期す。
(詳細はりんごの項を参照)
ハウスぶどうでは、暖房器具（石油ストーブ）を用いてハウス内を加温する。

野 菜

温度変化が激しい時期、きめ細かな温度管理に努めよう！

◆ トマト ◆

1 鉢上げ後の管理

鉢上げ後、しばらくは鉢底に根を張らせるために、かん水は控えめ(1回当たり 12cm 鉢に 0.1ℓ程度)に行う。

本葉 4 枚前後では下葉が 1 枚萎れたら、鉢底までの浸透を目安にかん水(1 鉢に 0.8ℓ程度)し、その後、本葉 6 枚までは下葉が 1 枚萎れたら少量かん水(1 鉢に 0.1ℓ程度)とする。

本葉 6～8 枚頃は急に伸びるため、下葉が 2～3 葉萎れたら少量かん水(1 鉢に 0.1ℓ程度)とし、やや乾き気味で徒長を防ぐ。

本葉 8 枚になったら鉢の底までかん水(1 鉢に 0.8ℓ程度)し、その後、定植までは萎れない程度の少量かん水(1 鉢に 0.2ℓ程度)で鉢の上部まで根を増やすようにする。

最高気温は、定植 5 日前までは 20～25℃で管理する。最低気温は、鉢上げ後～本葉 3.5 枚までは 16～18℃、本葉 6 枚までは 14～16℃、本葉 9 枚までは 12～14℃、定植までは 12℃以下にしないよう管理する。

徒長を防ぐため、本葉が 4 枚と 7 枚頃の 2 回、葉が重ならないように鉢の間隔を広げる(鉢ずらし)。

2 定植準備

堆肥や改良資材等は定植1か月前を、基肥は定植2週間前を目安に施用する。

■ 標準施肥量 (kg/10a)

窒素	りん酸	カリ	備考
10~12	28~35	10~12	・冬期間、屋根のフィルムを除覆しない場合、肥料が残るため、基肥量は土壌分析に基づいて減ずる。 ・接ぎ木苗では台木品種により基肥量を10~20%減ずる。

定植の7~10日前にはマルチを張り、深さ10cmの地温を15℃以上に高めておく。

3 定植

定植作業はなるべく温暖な日に行う。定植2~3時間前に鉢にかん水するが、肥料不足の場合は液肥で追肥を行う。

植え付けは、花房を通路側に向け、鉢の回りを両手で上から押して土と根鉢を密着させ、根鉢上面と畝面が同じ高さになるように行う。植穴を掘ったときに出土は植穴の周囲に盛り土として置き、マルチの熱が逃げないようにする。

夜間の冷え込みが予想される場合は、ハウスを早めに閉じ、保温に努める。また、可能な場合は、不織布等のべたがけで保温する。

◆ メロン ◆

1 育苗管理

(1) 移植（鉢上げ）

移植1週間前までに鉢に土を詰め、ビニールで被覆し地温を高めておく。

苗立枯病防止のため深植えせず、温度が下がり始める午後3時頃までに移植を終える。

(2) 移植後の管理

地温は下図を参考に管理し、トンネル内の気温は15℃~30℃を目標に管理する。

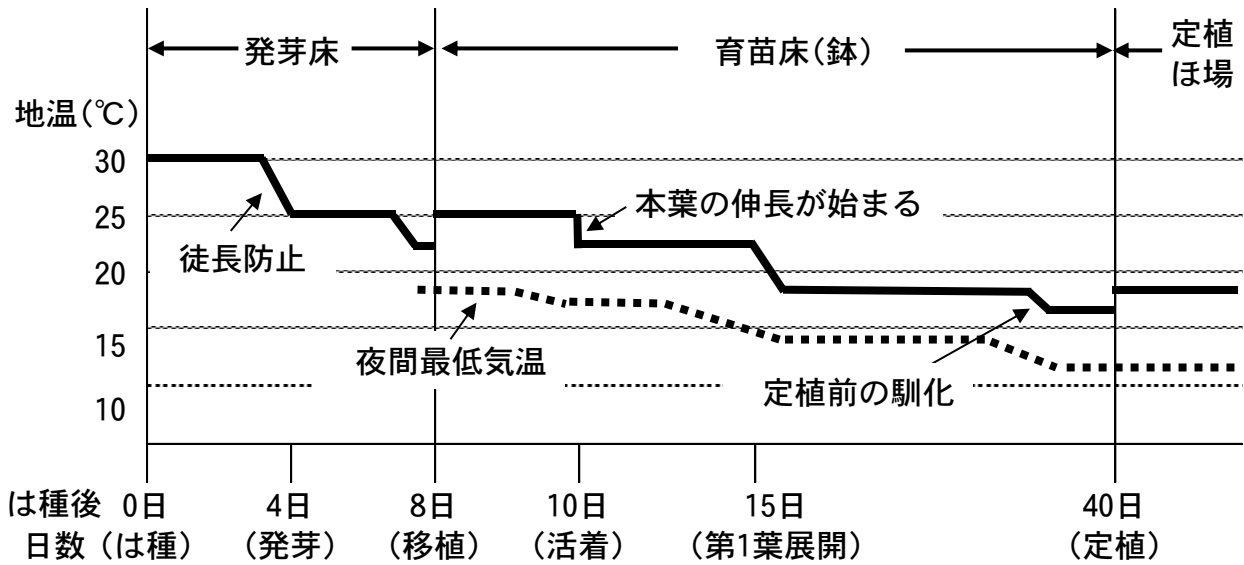
鉢上げ直後から1~2日間はトンネルを密閉し、日差しが強い時は遮光し、最高気温は30℃以上にしない。3日目からはトンネルを開閉して換気を行い徒長を防ぐ。

鉢の表面が乾いたら、地温を下げないように午前中に温水をかける。

葉と葉が重なり合うようになったら、鉢ずらしを行い、苗の受光体勢をよくする。この時、外側と内側の苗を入れ換え、生育を揃える。

定植の7日位前から夜温を徐々に下げ、苗を外気に慣らす。

■ 発芽床と育苗床(鉢)の床温(地温)管理



2 本畑の準備

堆肥や改良資材等は定植2週間前に、基肥は定植10日前に施用する。

畝の高さは、畑地では20cm、転作田では30cmの高畝とする。

定植の1週間前にはマルチ、トンネルを張る。マルチは、地温上昇効果や抑草効果の高いグリーンマルチを使用し、深さ20cmの地温を18°C以上に高めておく。また、均一な土壌水分を確保するため、マルチ前に十分かん水するか、降雨後にマルチングする。

3 定植

速やかな活着を促すため、定植作業はなるべく温暖な日に行う。

夜間の冷え込みが予想される場合は、早めにトンネル被覆資材を閉じるとともに、保温キャップや不織布などの資材を併用し、保温に努める。

花き

温度・水管理を徹底して初期生育を確保しよう！

◆キク◆

1 7月・8月出し栽培の管理

(1) 育苗

育苗期間は15~20日を基本とし、定植期に合わせて計画的に挿し芽を行う。早期発らいする品種もあるので、電照等により花芽分化を抑制する。

挿し芽は病害虫に侵されていない健全なものを選定する。

(2) 施肥

全量で窒素成分10~20kg/10aを基準とし、基肥として6~7割を施用する。追肥は、葉色や生育の状況に応じて適宜行う。

(3) 定植

定植は、無加温ハウス栽培では4月が適期となる。早すぎると奇形花等が発生しやすく、遅すぎると草丈が短くなるので、仕立方法を考慮して定植時期を決定する。

定植後は活着を促すため、むらなく十分にかん水し、10℃を目標に夜温を確保する。活着後は、昼温 25℃、夜温 5℃程度を目安とし、必要に応じて保温や換気を行う。

◆トルコギキョウ◆

1 夏出し栽培の管理

(1) 秋播き無加温栽培

日照時間の増加、気温の上昇に伴い茎が伸長するので、発らいまで極端に乾燥させないよう管理する。低節位から分枝が発生した場合は早めに除去して主茎の伸長を促す。

(2) 春播き栽培(4月定植)

ほ場のpHが低い場合、pH6.5を目標に土壤改良する。基肥は基本的に3要素とも10kg/10a程度であるが、ECが0.4以上の場合には下表を参考に減肥する。

■ 施肥前EC値による基肥窒素量減肥の目安(対基準量)

土壌の種類	0.3ms/cm以下	0.4~0.7	0.8~1.2	1.3~1.5	1.5以上
腐植質黒ボク土	基準量	2/3	1/2	1/3	無施用
沖積土・洪積土			1/3	無施用	
砂質土		1/2	1/4		

定植前に地温を12~20℃に高めておき、定植適期の本葉2.0~2.5対(展開葉4枚程度)の時に定植する。

かん水は地温が急激に下がらないよう暖かい日の午前に行い、極端に乾燥しないようこまめに行う。

2 春播き秋出し栽培のは種・育苗

育苗用土はpH6.5前後で肥料成分が含まれている清潔なものを使う。用土に有機質が多く含まれているとチビクロバネキノコバエが増殖しやすいので注意する。

小さいセルで育苗すると老化しやすいため、288穴程度の大きさのセルトレイに1穴1粒播きする。は種後は覆土はせずに、発芽まで昼温20~25℃、夜温15~18℃を目標に管理する。

発芽までは乾燥させないことが重要で、上部からのミストかん水が望ましいが、そのような設備と労力がない場合は底面吸水も有効である。その場合は、育苗箱の底から根が見え始めたら、上部からのかん水に切り替える。

発芽揃い後は、昼間20℃、夜間15℃程度を目安に管理する。